

開山1300年を迎えた白山 —かつての白山信仰と、白山山中での昔のくらし—

長岡 正利

はじめに

白山(標高2702m)は、富山・石川・福井・岐阜県にまたがる白山山系(両白山地)の主峰であり、手取川・庄川・九頭竜川の水源地域にあたる。その主要な山域は「白山国立公園」に指定されている。

その山頂部には歴史上の噴火記録のある火口湖もあり、山麓には温泉も多い。森林限界を抜けた山頂部には高山植物が多く、周辺には広大なブナ林が広がる。

かつての白山信仰

山麓から秀麗な姿が望まれる白山は、奈良時代になると修験者の信仰対象の場となったようで、伝承によれば、越前国の修験者・泰澄が養老元(717)年に登頂して「開山」した。今年がその1300年目にあたり、関係の各地では、開山1300年祭が賑やかに催行された。

泰澄は、現・勝山市の東、後に平泉と称されることになる平清水(ひらは崖の古語)で貴女(白山女神)の宣託「我は天嶺にあり・・・」を得た。山頂に登拝した泰澄に翠ヶ池から九頭竜が現れ、更に一心に念ずるうち、白山神の本地である十一面観音が示現した(写真3・4)。

平安時代には、越前・加賀・美濃から、白山山頂への禪定(登拝)道(図1)が設けられて、各馬場には、平泉寺(写真1・3)・白山寺・長瀧寺が創建された。白山修験は、室町時代には比叡山延暦寺とも結んで大きな勢力となり、全国に白山信仰が広まった。

三馬場のうちで最も繁栄を極めたのが平泉寺で、一向一揆(天正2(1574)年)で全山焼亡する以前の、室町・戦国時代の最盛期には48社36堂6000坊の、宗教都市ともいえる規模であった。当時の宏壮な三十三間拝殿の礎石列が現存している(写真1)。

一向一揆の災禍を経た平泉寺は10年後には復興にむかい、江戸時代には、白山山頂に奉納の華麗な銅造

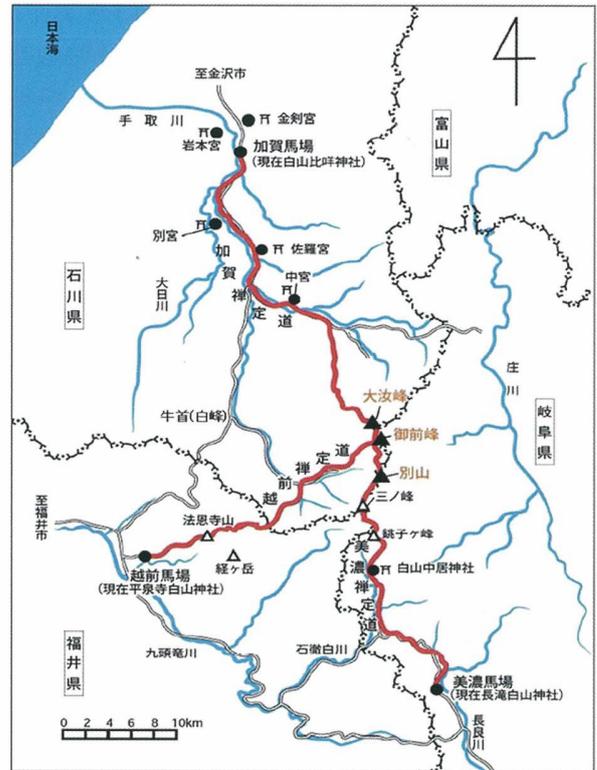


図1 白山の三馬場と禪定道『白山の自然誌21「白山の禪定道」』石川県白山自然保護センター、2001から転載・加筆

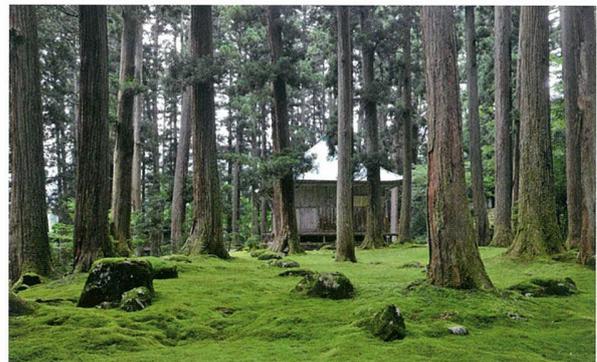


写真1 苔が美しい平泉寺白山神社拝殿と、かつての三十三間大拝殿の礎石列



写真2 ①開山1300年祭礼での平泉寺白山神社本殿開扉時の、女神像御前立お顔(ご開帳は33年毎で次回は2025年)。②平泉寺辻観音堂に伝わる聖観音菩薩。③平泉寺顕海寺に伝わる阿弥陀如来菩薩(奥州藤原秀衡寄進。一向一揆の際は井戸に沈めて10年後の再興時に曳き上げたとの伝承。)(以上、平泉寺白山神社様・平泉寺乾様・平泉寺顕海寺様のご好意により撮影。)



写真3 平泉寺の御手洗池。1300年前に白山女神が泰澄の前に出現十一面観音座像(写真6)を鑄造できる工房を有するくらの都市によみがえった。

しかし、明治維新後の神仏分離・廃仏毀釈は、それまでの神仏習合を強制的に神社と寺に改組し、白山への信仰はかたちを変えることとなった。山頂や各地に置かれていた平安時代以降の仏像などの殆どは破却または別に移され、その一部が各地の寺などに静かに安置されている(写真2・6)。

白山の山頂域にあった仏像の主なものは、明治以



写真4 白山山頂の翠ヶ池。泰澄の祈りに応じて十一面観音が示現前までは3つの禅定道とは直接の関係がなかった手取川上流の牛首(旧・白峰村)に降ろされて、現存している。(写真6)

明治以降の白山比咩神社を総本社とする白山神社は全国に約2700社といわれる。同神社が総本社となるのは、明治4(1871)年に神祇官が同神社を国幣小社として以降のようで、それ以前は、全国各地の「白山神社」は、「白山権現(社)」や「白山宮」「白山堂」の名が普通であった。

白山山中での昔のくらしー出作り



写真5 白峰大道谷の奥、五十谷にあった出作りの家。①は稲作が行われていた最後の年の新雪。②耕作放棄されて数年後には茅原となり、やがて家は潰れて、③40年後の今は植林された杉が育ち、かつての特徴ある五葉松の梢が杉の樹間に覗くのみ(赤色矢印の先)。

白山の西側山中には、古くから「出作り」といわれる農業・生活のかたちがあった。無雪期のみ山中に移り住むものから、年間を通してのものまで、様々であった。本村のある谷間沿いには水田適地が少ないことから、山腹で焼畑耕作を主としていたもので、養蚕・炭焼き・林業も盛んであったが、全国におけると同様に

昭和30年代には衰退した。出作りは、その後も細々と行われていたが、高度経済成長の終わり頃には、辺鄙な山間部には住む人々はいなくなり、豪雪地のこともあって家々は自然の中に埋もれ去ってしまった(写真5)。

今、それらの家々と生活のあり様は、白峰にある「石川県立白山ろく民俗資料館」に僅かに残されている。



写真6 ①美濃禅定道石徹白の虚空蔵菩薩(藤原秀衡寄進、重文)。②越前禅定道室堂と③山頂御前ヶ峰から白峰林西寺へ下山の十一面観音菩薩(前者は重文)。④加賀禅定道檜之新宮から尾添下山仏社へ下山の観音菩薩。(以上、石徹白大師講上村様・白峰林西寺様・尾添林様のご好意により撮影。)

(11期・長岡によるここまでの3頁は、季刊『地図情報』143号の「伊能忠敬特集」に寄稿を依頼されたものを、そのまま転載したものです。それゆえに、このページでは、伊能図との関連を述べたものになっています。)

伊能図に見る白山眺望 (本号特集のために)

白山の一角は豪雪地のため、初夏の頃までは、日本海沿いの平野から白雪の山なみを望見できる。図3のように遙かに濃尾平野と伊勢湾からのほか、北アルプスの山頂からは特徴あるその山容全体が望まれ、紀伊半島の山や南アルプスからも見える。京都の山や神戸の六甲山頂からも、条件が良ければ見える(図2)。

図5は、伊能図中図から白山の東西部分を抽出したものである。山頂に収斂する方位線は、遠くに見える山頂の方位を測定した線で、方位角が記されている。中図には、主な山や島嶼への方位線が描示され、それらは総てがその頂部一点で完全に合致している。それは、測量ではあり得ないことであり、この合致は奇妙である。山は、高さが同じ程度のピークの集合のことがあり、山麓から見ると方位と遠近によっては、異なるピークをその山の最高地点と誤認することもある。本稿冒頭の写真は、既に述べた越前禅定道が県境を越える辺りの取立山からの白山だが、ピークは2つ見える。この見え方は、福井・石川県の平野では同様であって、図5に描かれた白山のようには見えない。図4は、図5での白山への方位線の最南端のものについて、その見え方を「カシミール3D」で再現したもので、その視点からの富士写ヶ岳はその名のように台形に見える山。視点-富士社山(富士写ヶ岳)山頂-白山山頂は直線には並ばない。これをどう考えるかは、読者諸氏の評価にゆだねたい。なお、伊能図での山の殆どは、「山とはかくあるべし」の形で、図4に見るような実際の姿とは異なる。

伊能図は、日本列島の概形を描いてはまぎれもなく高精度かつ美しい地図ではあるが、図中の山については問題点が種々ある。内陸部で他の測線との連結のない土地の位置については、精度上問題のあるところ(図での白山と飛騨高山の位置関係など)もある。

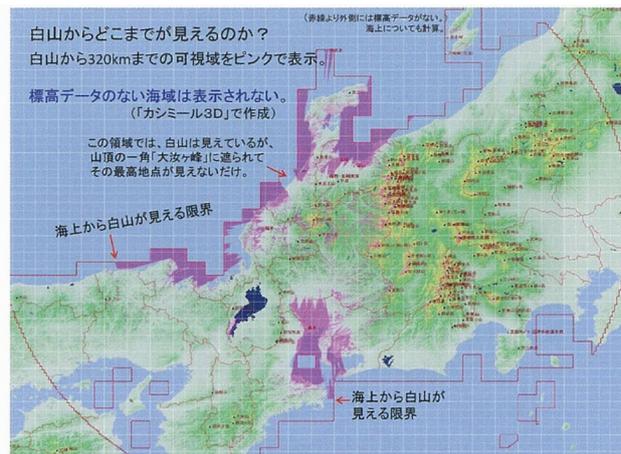


図2 白山を見ることができる地域(「カシミール3D」で作成)



図3 かつては名古屋駅ビルから見た白山(金沢大WV-OB森川さん撮影:その後ビルの影となって眺望は遮られた。)

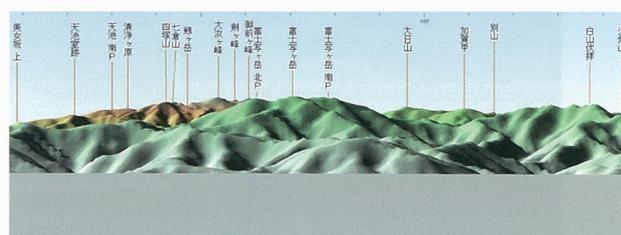


図4 白山に達する方位線(図5)のうち最南の、三国湊近くから見た白山(「カシミール3D」で作成:2つの山は各最高地点が不分明で、それらは一直線上にはない。)

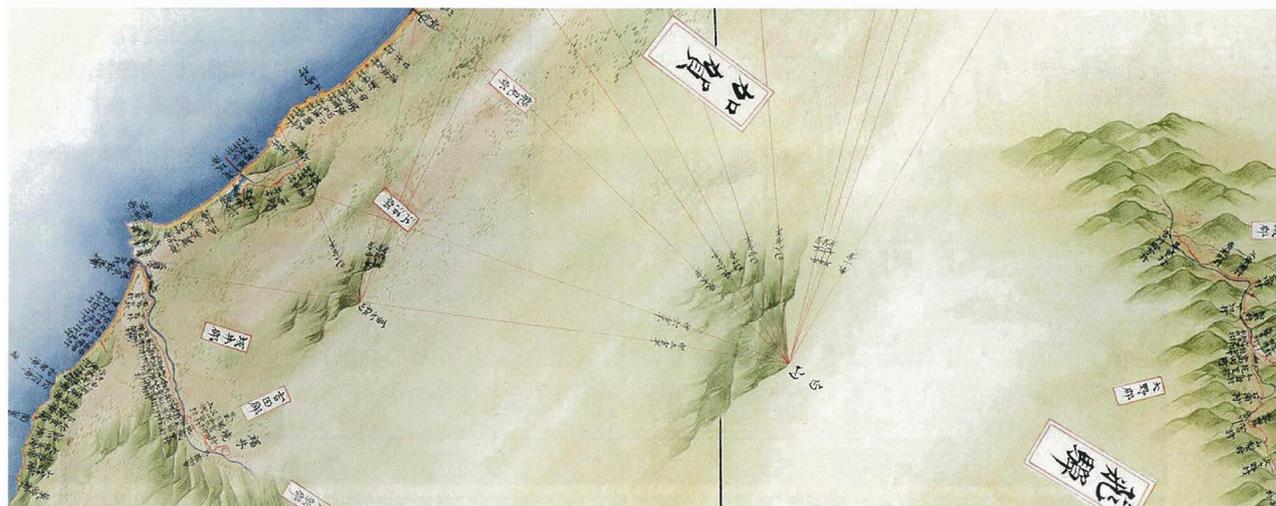


図5 伊能図中図「中部」の、九頭竜川河口～白山～飛騨高山の部分(「東京国立博物館所蔵伊能図による武揚堂『伊能図』(清水・長岡・渡辺・武揚堂編著、2002)」)